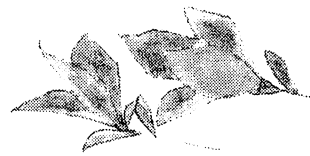


加藤辨三郎 述

# 歎異抄

18

文責 本誌編集部



念佛者は無礙の一道

さて、きょうは第七章でございます。

念佛者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神・地祇も敬伏し、魔界・外道も障礙することなし。罪悪も業報を感ずることあたはず、諸善もをよぶことなきゆへに無礙の一道なりと、云々。

まず「念佛者は」という言葉が出てきます。何でもないのであるが、金子大榮先生は、ずいぶん「苦労なさっております。このテキスト(岩波文庫・歎異抄)の下の欄の注釈を見ると、「念佛(者)は、者をは」と訓したるものが、者はと連書された」とあります。これは金子先生の注釈ですが、先生ご自身、じつは、このたった三文字、つまり「は」「者は」で、大きな転換をなさっていられるのです。お若いときには「念佛者は」ということをご講義なさっていましたが、先輩の大家の方から「念佛者は」でなく

「念佛は」なのだとおしかりがあったようです。また、国語や漢文を専門に勉強している後輩の方から、中国では「念佛は」という意味のときに「念佛者」と書く、それを日本語に翻訳するときに「は」と読む意味で、「念佛者」と書いて、その下に「は」の字を入れて「念佛者は」と書く習慣になっている、鎌倉時代には専らそういう習慣で、それをご存知ないのでしようといった主張があったようです。ちょうどそのころ、岩波書店から文庫の『歎異抄』を依頼されて、非常にお考えになったと思うのです。それで国語学者の仰せを、注のところでご紹介になったと拝察いたします。

ところが晩年になりますと、どうも「念佛は」ではピンと来ない、弱い。やはり「念佛者は」というとピンと来るとお感じのようで、晩年は「念佛者は」とおっしゃっています。そのときは、いろんな文献を引き、いろんな論説を掲げています。

その中で『大乘起信論』の「道は人なり」という言葉を引いていられます。普通、子は宝という。しかし考えると、おかしいのではないか。子は人間だ。だが、言う方も、聞く方も、子は宝といえ、よくわかる。そのように、道々

といっても、人があって初めて道が道になるのです。念佛もそうで、念佛、念佛といっても、人を離れてしまったのは、全く何のことかわからない。だから、念佛は人なり、人は念佛なりのです。ゆえに念佛者は無礙の一道なりと読むのは、文字の講釈ではない。念佛は無礙の一道なり、それも悪いわけではないが、念佛者は無礙の一道なりといったとき、金子先生は、何かピリッと教えてもらったような感じがすると仰せになりましたが、わたしもそう思うのです。

#### 無上正徧道

『歎異抄』は、法を信ずる人を中心に編集されています。ですから、念佛は、つまり念佛なるものということも間違いではないと思いますが、それでは何か人ごとになる。自分は信じなくても、念佛というものは、要するに無礙の一道だ、よで済みそうなのです。しかし、念佛者は、つまり念佛を称える人、それが無礙の一道だと、自分自身が受けて、ありがたいなあ、そこに救いを感じるのであります。それで、初めて念佛者は無礙の一道なりがいただけるのであります。

そこで、第七章の中心は、無礙の一道ということですが、親鸞聖人は、『教行信証』で、「他力といふは、如来の本願

力なり」と宣言されていますが、その証拠として、曇鸞大師の『浄土論註』を長々と引いています。そこに、この無礙の一道が、非常に親切に、かんで含めるように書いてあるのです。

そこをかいつまんでもうしあげます。佛さまのさとりは、阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらさんみやくさんぼだいということ、阿耨多羅三藐三菩提を得たというのが佛になったということです。釈尊のおさとの内容は、梵語でいうと阿耨多羅三藐三菩提です。この阿耨多羅三藐三菩提は、インドの言葉ですから、中国の人は、それを苦心惨たんして中国語に翻訳したわけです。

その翻訳は幾つかあるが、曇鸞大師は「無上正徧道」と翻訳されました。そして「阿」は無、「耨多羅」は上、「三藐」は正、「三」は徧、「菩提」は道と説明し、さらに無上とは、「理をきはめ、性をつくすこと、これにすぎたるはなし」とあるのです。だれもノーといえない、否定できないう、これ以上いいようがない、究極の真理。それが無上で、上がないとは、すべての道理をきわめ性をつくすことである。性は本性、物のあり方、ありよう、その真相をきわめつくした、それを無上というといっています。

正とは聖智、聖智は佛さまの智慧ということ。それゆえ

正。本当の正しい智慧とは如来のみ知りたまうところの智慧である。ゆえに正智という。

徧とは二通りある。一つは如来の御心、これは一切十方世界を隈なく照らしていて、届かないところはない。これは大慈悲心といってもいい。徧するは、あらゆるところに存在するということで、至らぬところはないのです。それからもう一つは、如来の御体、法身、これまた至らぬところはない。それは植物であれ、動物であれ、山であれ、川であれ、至らぬところはない。法身佛はあまねく行き渡っている。だから聖智もあまねく行き渡っているが、法身もあまねく行き渡っている。それが徧ということです。

さて、最後に道。道とは、「生死すなはち涅槃なりとしる」ことだといっております。これは『正信偈』に「惑染凡夫信心発、証知生死即涅槃」とあります。この証知の証は証明です。これは教えを聞いて信じさせていただくことです。法を聞く、釈尊がこう仰せになっている。『大無量寿経』にこう書かれています。それが、われわれには、何よりの証拠です。經典があつて、初めてわれわれは証知ここにありといえる。そのことをはっきり知るのが証知。もう一つ別の言葉でいえば、信じさせていただいたというこ

とです。何を信じさせていたか、生死即涅槃、われわれが迷うたり、煩惱熾盛であれやこれやいつている、いうならばこの短い一生そのままがすなわち涅槃である。即ち迷っているこの一生が、そのまま悟りの世界で、迷いの世界なくして悟りの世界もまたない。悟りの世界があらわれて、そこにまた迷いの世界が感じられる、はっきりと認識されている。それなのにわれわれが相変わらず迷っているのは、それは煩惱のせいです。眞信心の天は輝いているけれども、その下に霧が出たり、雨が降ったり、みぞれが降ったりする。それでせつかくの晴天が見えないのです。その雲霧の上へ上がっちゃうと、そこは晴天だという教えです。それが、すなわち理をきわめ性をつくされた智慧であると思うのです。

#### 煩惱や悪業に妨げられない

しかし、わたしどもは下手な講釈をやっているようではだめで、やはり信ずる。それがすなわち本願を信じ念佛もうさば佛になる、そのように信じさせていただくことです。理屈をいっても、とうていわれわれの力は及びません。幾

らひねくり回したってだめです。無礙の一道とはそういうことであって、十方世界の菩薩方が、全部この道一つから出て佛さまになられたのです。一切菩薩が佛になられる、ただそれ一本です。それが生死すなわち涅槃なりと知るこの道だと説いてあるわけです。

そこで、本願を信じ念佛もうさば佛になるといふ、あの平易な言葉の持つ中身の深さがよく感ぜられるわけです。本願を信じ念佛もうさば佛になるといふことが、阿耨多羅三藐三菩提を得る道なのです。それが無礙の一道という。

親鸞聖人は、それをここに引いて説いていられると同時に、もっと平易に、無礙というのは、煩惱や悪業に妨げられることはないのだと説いていられます。これは『一念多念文意』に書いてあります。われわれ悪業ばかり重ねて、煩惱熾盛のだけでも、それがじゃまにならない道、無礙の一道です。一切のものにさわりなしと、無礙光を説いていられる。

ですから、「念佛者は無礙の一道なり」のあと「そのいはれいかんとならば」といって、四つ挙げられています。『そのいはれいかんとならば』で結構ですが、わたしの気持ちからいくと、「さればこそ」といいたいです。しか

しここでは、そのいわれはどうだといって四つ挙げておいでになる。まず「天神・地祇も敬伏し」、天神・地祇というのは、日本ではやおよろずの神々です。学者の間では、天神地祇というのは、日本の神様ではなく、インドの神様のことではないかという説もありますが、唯円は日本の神々を指して書いたと受け取ってもいいのではありませんか。また当時はそれが常識みたいになっていたのではありませんか。思います。

『御伝鈔』といって親鸞聖人のひ孫の覚如上人が書かれた親鸞聖人の御一代記があります。その中に、親鸞聖人が、常陸の国を出発して京都へお帰りになる。そのときに箱根山に差しかかる。日が暮れたが予定どおりお進みになる。すると静まり返っておる山道に、ひげの生えたおきながらわかれて「あなたですか。先ほどこよつとうとうとしていたら、夢に箱根権現があらわれたもうて、今この道を尊いお坊さんがお通りなるよ。だからその方を大切にもてなさなくてははいけないよというおさとしがあった」と言ったのです。といったかと思うと、おきなの姿は見えなくなったと書かれています。これは要するに箱根権現様が親鸞聖人を敬って、いわれたのでしょうか。けれども、わたしど

もが読みますと、せっかくの御伝鈔ですが、素直にそのとおり信じることができないのです。正直なところ、こういうところはなくてもいいのではないかと思うのです。けれども、それは今日科学だ、何だと習っていて、その頭でいうからそういうぐあいになる。鎌倉時代の方は、そうでもなくもつと素直です。唯円なんか非常に信心深い人だから、やおよろずの神もやはり念佛者に対しては、このように尊敬してくださいのだと思っていたのでしょうか。覚如上人は、もちろん深くそれを信じてお書きになっていられる、当時はそうであった。

わたしは金子先生の教えを学んで、なるほどそうだと思います。これは何もわれわれを尊敬する意味ではなく、本願を信じ念佛もうさば佛になるという、その法を尊んでいられるのです。やおよろずの神様も、たとえば生死即涅槃というようなことを聞けば、そのとおりだ、深い教えだと同感され、その道を信じている人に向かつては、みな尊敬をしてくださるといふ境地です。それが信心の行者の境地です。念佛者は、こういう心境に入らせていただけると受け取ると、大変よくわからせていただけると思います。